
内包的意味からみた 達成関連感情の特徴と構造

奈 須 正 裕

問 題 と 目 的

教室という学業達成場面において、学習者は常に様々な感情を経験している。感情は、学習者に、現在の学習活動やその成果、あるいは自己の状態がどのようなものであるかを告げ、今後どうすべきであるかに関する情報を提供する。したがって、感情経験は、その後の学習課題への取り組みや意欲、態度、さらには実際に遂行される学習行動の量的、質的あり方を左右する要因の1つであり、ひいては学校学習への適応にも影響を与えると考えられる。

このように、学業達成場面における学習者の感情(達成関連感情：achievement-related affects)経験は、学校学習を考えていく上で重要な要因の1つである。しかし、心理学の領域において、この問題は、比較的最近まで十分に検討されることがなかった。一般には、Weiner, Russell & Leaman (1978, 1979) の先導的研究がきっかけとなり、その後、そこで提唱された結果依存—帰属依存という感情の分類概念の妥当性をめぐって研究が盛んになったとされる。

このような経緯を反映してか、これまでの達成関連感情に関する研究は、Weiner 理論の影響の下でなされたものがほとんどである。したがって、

Weiner 理論の関心の方向、すなわち達成関連感情の喚起機構、特に原因帰属の及ぼす影響を検討課題とするものがその大多数を占めている。このことは、裏返せば、喚起機構以外の事柄、例えば各感情の特徴や感情経験全体の構造などが、達成関連感情研究においては主要な関心事ではなかったことを意味する。感情の特徴づけに関して、Weiner は、喚起機構上の特質に基づく、結果依存－帰属依存という分類概念を提唱しており、その妥当性も限定つきながら確認されている（奈須，1993a）。しかし、感情の特徴づけは、喚起機構の観点からのみならずのものではないし、またそれだけで十分であるとも言えない。

一方、伝統的な感情理論には、Weiner 理論と同様、喚起機構を主要な関心事とするもの（Arnold, 1960 ; Cannon, 1932 ; James, 1890 ; Lazarus, 1968 ; Schachter, 1964 ; Valins, 1966 など）以外に、感情の特徴・構造をテーマとする理論群（Ekman, 1955 ; Mehrabian, 1980 ; Nowlis, 1965 ; Plutchik, 1962, 1980 ; Schlosberg, 1954 ; Tomkins, 1962, 1963 ; Watson & Tellegen, 1985 ; Woodworth & Schlosberg, 1954）がある。そして、これらが、感情経験の理解において、喚起機構研究と同等あるいはそれ以上の多大な貢献をしてきたことは周知の通りである。達成関連感情研究において喚起機構がもっぱら問題とされ、特徴や構造が検討されてこなかったのは、それが意味がないからではない。それは、Weiner ら（1978, 1979）の研究が契機となり、その後も Weiner 理論の強い影響下で研究が進められたという、研究史上の経緯によるものと推測される（奈須，1992）。このように考えるならば、達成関連感情の特徴や構造を多面的に検討することは、達成関連感情の理解において新たな視座を提供する可能性を秘めている。達成関連感情の特徴や構造の検討は、喚起機構や動機づけ機能の解明と並ぶ重要な課題の 1 つと言えよう。

このような問題意識から、本研究では、SD 法を用い、内包的意味の観点から達成関連感情の特徴・構造に関する検討を試みる。SD 法は、対象の持つ内包的意味、わけても情緒的意味の検討に際し、Osgood, Suci & Tannenbaum

(1957)が開発した手法である。オリジナルのSD法では、いかなる対象の内包的意味の抽出においても、評価(E)、活動性(A)、力量(P)の3次元が必要かつ十分な次元とされる。

一方、感情の構造に関する諸研究においても、その表現こそそれぞれ微妙に異なるものの、基本的には3つの次元の存在が示されてきている(Abelson & Sermat, 1962; Bush, 1973; Engen, Levy & Schlosberg, 1957, 1958; Mehrabian, 1980; Russell & Mehrabian, 1977; Schlosberg, 1954)。そこでは、諸感情の顔面への表出あるいは代表的な感情表現語の異同が分析された。その結果、快—不快、賦活水準(緊張—睡眠, 覚醒—無覚醒), 注目—拒否(支配—服従)の3次元によって、感情の構造を記述し、また各感情を特徴づけることができるとの結論が導かれている。例えば、Schlosberg (1954) は、ひとの感情経験は、FIG. 1 に示すような3次元構造を成していると考えた。そして、この快—不快、賦活水準(緊張—睡眠, 覚醒—無覚醒), 注目—拒否(支配—服従)という3次元は、それぞれ、SD法における評価、活動性、力

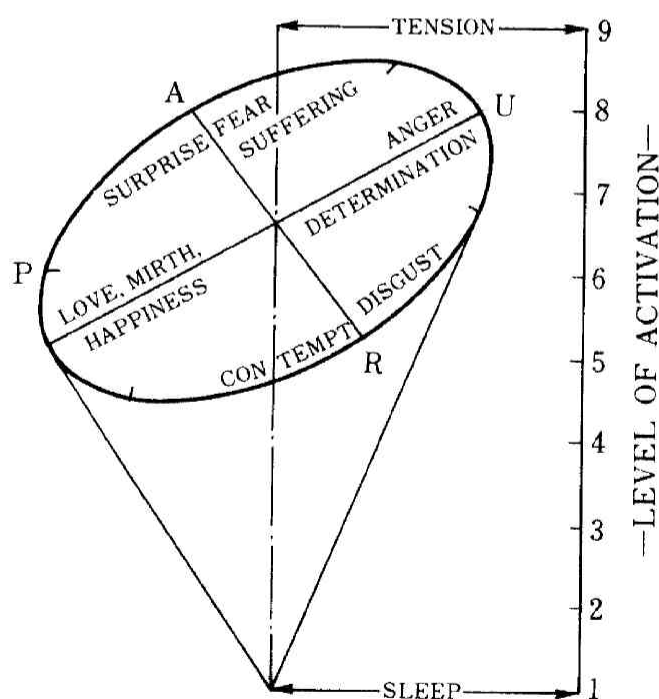


FIG. 1 感情の3次元モデル (Schlosberg, 1954)

量に対応すると考えられる (Osgood, 1966 ; Russell & Mehrabian, 1977)。

そこでここでは、この3次元で構成したSD尺度を用い、内包的意味の観点から達成関連感情の特徴・構造を探索的に検討する。そして、各感情の特徴をより鮮明に浮び上がらせると同時に、感情一般について提唱されてきた3次元構造が、達成関連感情にもあてはまるかどうか検証する。

方 法

調査対象：大学生224名を、56名ずつランダムに後述の4群に分けた。

調査の概要：奈須・堀野 (1991) が見出した12の達成関連感情を検討対象とした。12の感情ごとに、それぞれを表す2つの感情語をSD法のコンセプト (評定対象) として抽出した。そして、各コンセプトに対して抱いたイメージに基づき、18項目からなるSD尺度への評定を求めた。SD尺度は、Osgoodにおける評価、活動性、力量に対応する、快—不快、覚醒—無覚醒、支配—服従の3次元から構成されている。評定に際しては、奈須・堀野 (1991) と同様に、仮想場面のシナリオを用い、その場面での登場人物の感情経験の表現として各コンセプトを提示するという手続きをとった。このようにして得たSD評定の各次元の値のパターンを検討することにより、各達成関連感情の内包的意味における特徴について考察する。

コンセプト：12の達成関連感情について、各感情を表す感情語の中から、それぞれ2語 (2項目) を選び、SD評定のコンセプトとした。したがって、コンセプトは、2項目×12感情の都合24 (TABLE 2, 3 参照) となり、この24のコンセプトに対しSD評定を繰り返すことが求められる。調査実施に先立ち、予備的に7名の大学生に、24コンセプトすべてに対するSD評定を求めた。その結果、要する時間や作業量負担の大きさ、同じ尺度に繰り返し回答することによる不真面目な回答などの問題のあることがわかった。このことから、同一被験者に24のコンセプトすべてに評定を求めることは困難である

と判断した。そこで、本調査実施に際しては、被験者をランダムに56名ずつの4群に分け、各群の被験者に対し6コンセプトへの評定を求めることにした。このような手続きには、結果に対し、人と状況の要因が交絡して影響を及ぼす点で問題がある。ただ、大量の評定を要する感情の構造研究では、しばしば同様の調査手続きがとられてきている（例えば、松山・浜・川村・三根, 1978; Mehrabian, 1980; Russell & Mehrabian, 1977; 寺崎・岸本・古賀, 1992)。そして、いずれの研究においても、このことが結果に大きな影響を及ぼしたとの報告はない。問題は残るが、このような諸研究の結果も参考にし、次善の策として、ここでは上記の手続きを採用することにした。

コンセプトの提示文脈（シナリオ）：成功・失敗及びコンセプトの違いによって24種類のシナリオがある。シナリオの一例を示す。

「今日、A君の通っている高校では、先日行われた定期試験の答案が返却されます。A君はある科目の試験成績が気がかりでした。というのも、その科目の試験成績がよいか、わるいかは彼にとってとても重要なことだったので。A君の名前が呼ばれ、先生から答案が手渡されました。A君は答案を受け取ると、まっさきに成績（点数）を見ました。A君の成績はとてもよい成績でした。

A君は、「やったー」と思いました。」

コンセプトは、最後の1文のかぎ括弧内の感情表現によって提示される。また、失敗感情がコンセプトの場合には、最後から2番目の1文の後半が「とてもわるい成績でした」に変わる。

調査内容：Mehrabian (1980), 岩下 (1983)などを参考に、3次元各6項目、計18項目からなるSD尺度を作成した (TABLE 1 参照)。ここでは、Mehrabian (1980)にならい、各次元を快—不快、覚醒—無覚醒、支配—服従と名づけておく。

その場面での登場人物の感情経験の表現（コンセプト）から受けたイメージにもとづき、各項目について7段階で評定を求めた。なお、SD尺度に付す

程度を表す副詞としては「とても」「かなり」「やや」を用い、ニュートラルな反応の段階には「どちらともいえない」を付した。

手続き：調査は、すべての調査内容を1つのブックレットの形に整えて配付し、集団式、無記名で実施された。評定の実施に先立ち、SD 評定のやり方について若干の説明がなされた。実施場所は大学の講義室。所用時間は30～40分であった。

結 果 と 考 察

SD 尺度の因子分析結果：まず、SD 尺度の各項目について、それぞれ－3から3の値を順次与えた。スコアリングは、項目作成時の予測に基づき、それぞれ、快、覚醒、支配の方向で値が正となるよう行った。

次に、主因子法による因子分析をほどこし、仮説に基づいて3因子を抽出した。これに、バリマックス回転を行い因子の解釈を試みたところ、予測された3因子が得られた。結果(バリマックス回転後の因子負荷量)を TABLE 1 に示す。

TABLE 1 より、第 I 因子は、「不愉快な－愉快的」「満足な－不満足な」「幸福な－不幸な」「苦しい－楽しい」「希望に満ちた－絶望した」「うんざりした－くつろいだ」の各項目に高い因子負荷量を示している。したがって、第 I 因子は「快－不快」の次元を表す因子と考えられた。第 II 因子は、「支配している－支配されている」「受動的な－能動的な」「服従的な－支配的な」「自律的な－誘導的な」「独立した－依存した」「影響される－影響する」の項目群においてその因子負荷量が高い。このことから、第 II 因子は「支配－服従」次元の因子と解釈できる。第 III 因子については、「興奮した－おだやかな」「静的な－動的な」「おちついた－刺激された」「ねむそうな－すっきり目をさました」「敏感な－鈍い」「はっきりとした－ぼんやりとした」の各項目において高い因子負荷量を示されている。よって第 III 因子は「覚醒－無覚醒」

TABLE 1 SD 尺度の因子分析結果（バリマックス回転後の因子負荷量）

項 目		I	II	III	共通性
不愉快な	愉快な*	.92	.11	.01	.85
満足な	不満足な	.92	.12	.04	.86
幸福な	不幸な	.91	.12	.04	.85
苦しい	楽しい*	.90	.16	.04	.83
希望に満ちた	絶望した	.89	.21	.10	.85
うんざりした	くつろいだ*	.80	.25	-.06	.70
支配している	支配されている	.23	.68	.14	.58
受動的な	能動的な*	.18	.66	.29	.69
服従的な	支配的な*	.13	.66	.34	.50
自律的な	誘導的な	.15	.64	.23	.49
独立した	依存した	.05	.61	.24	.39
影響される	影響する*	.07	.42	-.01	.50
興奮した	おだやかな	.01	.12	.75	.53
静的な	動的な*	.20	.39	.70	.57
おちついた	刺激された*	-.31	-.04	.63	.56
ねむそうな	すっきり目をさました*	.13	.36	.59	.49
敏感な	鈍い	-.03	.26	.56	.44
はっきりとした	ぼんやりとした	.29	.37	.53	.18
因 子 分 散		5.14	2.98	2.74	10.86

※①右かたにアスタリスクを付した項目は逆転項目である。

②各項目は、快、覚醒、支配の方向で得点が高くなるようスコアリングされた。

の次元を指し示していると考えられる。

このことから、作成された SD 尺度は、予測された 3 因子構造を有することが確認された。

3 次元の観点からみた達成関連感情の特徴：因子分析結果をもとに、3 つの因子ごとに、因子負荷量の高かった各 6 項目の得点を加算し 6 で除した値を求め、それぞれ快—不快（第 I 因子）、覚醒—無覚醒（第 III 因子）、支配—服従（第 II 因子）次元の個人得点とした。3 つの次元の観点から 12 の達成関連感情の特徴を検討するため、コンセプトごとに、当該コンセプトを評定した 56 名の各次元得点の平均値を求め、その平均値が 0 であることを帰無仮説

としたt検定(1%水準, 両側検定)を行った。各尺度は-3から0を経て+3までの値をとる。t検定の結果が有意でない, すなわち母平均の推定値が0ということは, その次元に対して「どちらでもない」との判断がなされたことを表す。その場合, 当該コンセプトは, その次元において明確な特徴を有しないと見なしうる。成功感情に関する結果をTABLE 2に, 失敗感情に関する結果をTABLE 3に示す。

TABLE 2より, まず成功感情において, 快-不快次元の値は, すべて正であり, 統制感・向上心を表す「がんばってよかった」を除いて, その検定結果も有意となった。成功という事態そのものが, そこで喚起される感情の快な特質と結びついているのだと解釈できよう。

TABLE 2 SD尺度の平均値と標準偏差(成功感情)

達成関連感情コンセプト	快-不快		覚醒-無覚醒		支配-服従	
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD
<u>よろこび</u>						
やった— ^{A1}	2.00*	.80	1.25*	.97	.41*	.92
うれしい ^{D5}	2.22*	.58	.85*	1.14	.75*	.76
<u>おどろき</u>						
意外だ ^{A5}	1.31*	.81	.64*	1.04	-.43*	.76
本当かなあ ^{C4}	1.57*	1.00	-.20	1.03	-.58*	1.06
<u>統制感・向上心</u>						
やればできるんだなあ ^{A3}	1.78*	.89	.34	1.17	.61*	.95
がんばってよかった ^{C3}	.16	2.15	1.05*	1.20	.44*	.79
<u>承認への期待</u>						
親や先生によろこんでもらえる ^{B4}	1.29*	1.20	.44*	1.09	-.85*	1.07
親や先生にほめられるぞ ^{D2}	2.06*	.84	1.62*	.74	.18	1.28
<u>優越感</u>						
自慢したい気持ち ^{B1}	1.50*	.85	1.41*	.76	.65*	.68
友達にどう思われるだろうか ^{C5}	.71*	.84	-.13	1.01	-.73*	.88

※ 各コンセプトの右かたに付した英字(A~D)は, そのコンセプトを評定した群を, 数字(1~6)は各群においてそのコンセプトが何番目に評定対象となったかを表す。

*p<.01

TABLE 3 SD 尺度の平均値と標準偏差（失敗感情）

達成関連感情コンセプト	快—不快		覚醒—無覚醒		支配—服従	
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD
<u>不愉快・困惑</u>						
情けない ^{A4}	-1.88*	.76	-.04	.78	-.32*	.84
悲しい ^{C1}	-1.71*	.72	.87*	.85	-.12	.86
<u>無能感</u>						
自分は頭がわるい ^{A6}	-2.13*	.72	-.15	.88	-.82*	.90
自信がなくなった ^{D6}	-2.17*	.67	-.44*	.76	-.85*	.92
<u>罰の予感</u>						
親や先生に申し訳ない ^{A2}	-1.61*	.88	.08	.72	-.70*	.73
親や先生におこられる ^{D4}	-1.84*	.67	-.10	.94	-1.45*	.87
<u>後悔</u>						
今度はがんばろう ^{B2}	-.37	1.07	.52*	.90	.21	.84
もっとがんばればよかった ^{C6}	-.10	1.45	.42*	1.03	-.05	1.15
<u>おどろき</u>						
どうしてだろう ^{B6}	-.92*	.90	-.49*	.87	-.30*	.81
まさか ^{C2}	-1.88*	.67	1.09*	.92	-.20	.77
<u>くやしき</u>						
くやしい ^{B5}	-.92*	1.00	1.80*	.78	.84*	.90
ちくしょう ^{D3}	-1.80*	.90	1.90*	.77	.77*	.96
<u>あきらめ</u>						
まあいいや ^{B3}	-.54*	1.05	-1.06*	.73	-.68*	.67
しかたがない ^{D1}	-1.42*	.71	-.55*	.81	-.61*	.67

※ 各コンセプトの右かたに付した英字（A～D）は、そのコンセプトを評定した群を、数字（1～6）は各群においてそのコンセプトが何番目に評定対象となったかを表す。

* $p < .01$

次に、感情ごとに結果をみていく。

まず、よろこびについては、2つのコンセプトを通して、3つの次元すべてが有意な正の値をとっており、この感情が快、覚醒、支配という特徴を有することが示された。特に、快—不快次元においては、そろって評定値が2以上であり、この感情がとりわけ強い快の状態を表すことを示している。パ

パーソナリティ傾性との関連を手がかりに達成関連感情の特徴を探った奈須 (1993b)においても、よろこびについて、強い快を示す喚起強度の高い感情ではないかとの予測がなされたが、ここでの結果は、この予測を支持するものと言える。

次に、おどろきについては、快—不快次元において有意な正の値が、また支配—服従次元において有意な負の値が、2つのコンセプトに一貫して示された。上述のように、快は成功感情全般に認められる特質である。一方、2つのコンセプトを通じて支配—服従次元が負の値を示したのは、成功感情ではおどろきのみであった。したがって、成功場面のおどろきは、服従という特質によって特徴づけられる。服従は、Schlosberg (1954) のモデルにおける拒否に対応する特質で、弱々しさ、消極性、緊張、恐れを示す行動傾向と関連が深いとされる (Mehrabian, 1980)。成功時のおどろきについては、学業成績との負の関係 (奈須, 1993c)、抑鬱性、劣等感、現実性のなさ、低い self-esteem など不適応的なパーソナリティ傾性との関連 (奈須, 1993b) が示されている。これらに通ずるものとして、おどろきにおける服従という特質を理解することができよう。

統制感・向上心の2つのコンセプトについては、おどろきとは対照的に、支配—服従次元のスコアがそろって正の値を示した。また、他の2次元においては一貫した結果が得られなかった。したがって、統制感・向上心は、支配という特質によって、その特徴を把握することができよう。支配は、Schlosberg (1954) のモデルにおける注目に対応する特質で、能動的な態度や力強さ、寛ぎ、勇気などを示す行動傾向と関連が深い (Mehrabian, 1980)。統制感・向上心については、動機づけに対する促進的はたらき (奈須, 1993c)、協調性や内的統制傾向との関連 (奈須, 1993b) が示されている。ここでの結果は、これらの知見と整合的に理解しうるものである。

承認への期待については、快—不快、覚醒—無覚醒の2次元において、両コンセプトの値が有意な正の値を示した。支配—服従次元に関しては、「親や

先生によろこんでもらえる」が有意な負の値、「親や先生にほめられるぞ」が正の値を示したが、これは有意ではなかった。「親や先生によろこんでもらえる」に認められた快、覚醒、服従というパタンは、おどろきを表す「意外だ」に示されたと同じものである。また、快と服従との組合わせは、同じくおどろきを示す「本当かなあ」および優越感を表す「友達にどう思われるだろうか」との間に共通な特徴である。これらのコンセプトに通ずる特質として、達成に対する消極的な態度や、他者からの評価という外在的なものへの意識を挙げることができよう。これらは、達成事態そのものへの関与度の低さや、積極性のなさに連なるものと考えられる。

最後に優越感については、成功感情全般に認められる快の特質のみが明確な結果として示され、残る2次元については、2つのコンセプト相互で符号の向きが正負逆となった。特に支配—服従に関しては、「自慢したい気持ち」が有意な正の値を、「友達にどう思われるだろうか」が有意な負の値を示している。そもそも優越感の感情は、自己の優秀さを外部にアピールしたいという気持ち（「自慢したい気持ち」に代表される）がある一方で、それが友人からの好ましくない反応をもたらしかねないという危惧（「友達にどう思われるだろうか」に代表される）と裏腹であるという複雑な感情を示すものと考えられた（奈須・堀野，1991）。支配—服従次元得点に関するこの結果は、この2種類の感情の間における気持ちの“ゆれ”の現れと解釈できよう。

一方、失敗感情については、TABLE 2より、まず、快—不快次元の値が、成功感情とは対照的にすべて負であり、後悔を表す2つのコンセプトを除いて、その検定結果も有意となった。失敗という事態そのものが、そこで喚起される感情の不快な特質と結びついているのだと解釈できよう。

次に、感情ごとに結果をみていく。

まず、無能感については、不快、服従という特質が認められた。特に、不快の値が2を越えているのは、今回用いた24のコンセプトの内、無能感に関する2つだけで、この感情が高い不快性によって特徴づけられることを示し

ている。また、服従は、この感情が弱々しさや消極性といった特質を持っていることを示している。

なお、欧米において同様の感情として取り扱われることの多かった、あきらめとの対比には興味深いものがある。あきらめの感情には、2つのコンセプトを通じて、不快、無覚醒、服従というパタンが認められた。支配—服従次元では両感情間には大きな違いはない。しかし、快—不快次元の値を比較すると、無能感が -2.13 、 -2.17 、あきらめが $-.54$ 、 -1.42 と無能感の方が不快の程度が強い。先行研究では、あきらめの感情には、自分の努力で事態を改善することができないと思っているにもかかわらず、抑鬱的な感じを持ち、自己を卑下し、自己の価値を低く見積もるといった諸傾向を伴わない、ある意味で楽観的な、あるいは状況への自我関与が低いという特質のあることが推測された（奈須，1993b）。無能感と同様に服従、すなわち弱々しく消極的でありながら、無能感と比べ不快の度合いが低いという、ここで示されたあきらめの特徴は、この予測を支持するものである。

罰の予感については、不快、服従というパタンが得られた。特に「親や先生におこられる」に認められた -1.45 は、今回の24コンセプト中、最も強い服従の度合いを示す値である。他者の評価に関わる感情としては、承認への期待の「親や先生によろこんでもらえる」、優越感の「友達にどう思われるだろうか」においても服従の特質が示されている。このことから、他者の評価に関わる感情は、成功・失敗の場面を越えて、服従によって特徴づけることができよう。

後悔に関しては、覚醒—無覚醒において有意な正の値が、また快—不快において、失敗感情中唯一負の値が有意水準に達しないという結果が得られた。2つのコンセプトともに覚醒を示したのは、失敗感情においては、後述のくやしさとこの後悔のみである。したがって、後悔は、相対的に覚醒度の高い感情と見なしうる。また、唯一不快という特質が示されなかったことから、後悔が、失敗を単にネガティブにのみとらえるのではない感情であることが

うかがえる。後悔は、失敗に際し、その原因やそこから学ぶべき点に意識の中心を移し、気持ちを切り換えるといったはたらきを伴うのではなかろうか。学業達成場面に関して、失敗経験をネガティブなこととのみとらえず、その情動的側面に注目することの重要性はしばしば指摘されるところである（堀野・市川・奈須，1990）。そのような行動傾向・認知傾向をより感情的な側面に注目して表現したものが、あるいは後悔に相当するのかもしれない。

くやしさに関しては、2つのコンセプトに一貫して、不快、覚醒、支配のパターンが認められた。覚醒—無覚醒次元における1.90、1.80という値は、24コンセプト中最高の値である。また、失敗感情について支配—服従次元の値が有意に正となり、支配の特質が示されたのは、くやしさが唯一である。したがって、くやしさは、覚醒度の極めて高い、また力強さのある感情ということができよう。

なお、不愉快・困惑とおどろきについては、快—不快次元においてのみ明瞭な結果が得られた。ただし、この不快の値も他の感情と比べてとりわけ高いという訳ではない。したがって、この3次元の観点から、これら2感情を特徴づけることはやや困難と思われる。

以上、SD法を用い、内包的意味の観点から12の達成関連感情の特徴の検討を試みた。その結果、まず、快—不快次元における判断は、成功・失敗という事態そのものに依存していた。唯一の例外は、失敗場面における後悔であり、この感情が失敗という不快な事態への合理的、適応的対処に伴うものであることを暗示している。一方、最も低い値、すなわち強い不快を示したのは、無能感だった。後悔は、努力帰属に導かれ、内的統制傾向と関連がある。一方、無能感は、能力・適性帰属に導かれ、外的統制傾向と結びついていた（奈須・堀野，1991；奈須，1993b）。このように、従来の検討において、両者は失敗感情の中で対照的なものと考えられていた。快—不快次元に関するここでの結果は、この対比に対応したものと見なしうる。また、予測されたように、よろこびの感情は、この次元において高い値を示していた。

次に、覚醒—無覚醒については、くやしきやよろこびにおいて値が高く、あきらめにおいて低い値が示された。くやしきは、その内容から、不満や自己への怒りを表すと考えられるが、不満や怒りを表す感情の覚醒度が高いということは十分予測される。また、あきらめについては、先の検討において、状況への自我関与の低さがその特徴であると考えられた（奈須，1993b）。あきらめの覚醒度が低いというここでの結果は、この理解と整合的なものである。

このように、覚醒—無覚醒次元は、達成関連感情の特徴把握に有益な情報を提供する。しかし、その一方で、同一感情を表す2つのコンセプト間で符号の正負が逆のものが5感情もあるなど、12の感情を単位とした場合には意味づけにくい結果も得られた。この点については、次のような解釈が可能であると思われる。

覚醒—無覚醒次元の値は、概念的にはそのコンセプトが表す感情経験の喚起強度に対応している。感情には、憎悪と毛嫌い、愛と好意のように、本来的には類似の感情であっても、喚起強度が著しく異なる場合には、別種の感情として経験されるものがある。この意味で、喚起強度は、感情の量的側面を指し示している。本研究の結果で言えば、例えば「意外だ」の方が「本当かなあ」よりも喚起強度（覚醒度）が高い。両者は、質的には、成功に対するおどろきという同種の感情を表しており、喚起強度という量的側面においてのみ異なると解釈できるのではなかろうか。このように考えるならば、他の2次元については、同一感情の2つのコンセプト間での結果の相違が、その数およびずれの程度において相対的に少ないことも納得がいく。ただし、本研究は、各感情の喚起強度について、これを直接に検討したものではない。したがって、以上の解釈の妥当性も含め、この点については、今後さらなる検討が望まれよう。

最後に、支配—服従次元に関する結果は、動機づけ機能やパーソナリティとの関連において示された各感情の特質（奈須，1993b，1993c）によく対応

していた。動機づけを促進する感情には、支配の特質が示された（よろこび、統制感・向上心、くやしき）。一方、動機づけを抑制し、抑鬱性や低い self-esteem を伴う諸感情には、服従の特質が示されたのである（成功時のおどろき、無能感、罰の予感、あきらめ）。このことから、達成関連感情の構造の把握においては、支配—服従の次元が最も包括的で主要な次元であると考えられる。

以上、本研究では、Osgood らが提唱し、また感情の構造研究でも指摘されてきた 3 つの次元を用いることにより、12 の感情の特徴と構造を検討してきた。その結果、これまで以上に各感情の特質を鮮明に描くことができたと思われる。と同時に、感情一般について考案された 3 次元が、達成関連感情の構造検討においても有効であることが明らかとなった。また、3 次元の中では、支配—服従の次元が、最も包括的で主要な次元であると考えられた。

引用文献

- Abelson, R. O., & Sermat, V. 1962 Multidimensional scaling of facial expressions. *Journal of Experimental Psychology*, **63**, 546-554.
- Arnold, M. B. 1960 *Emotion and personality*, Vol. 1. Columbia University Press.
- Bush, L. E. 1973 Individual differences multidimensional scaling of adjective denoting feelings. *Journal of Personality and Social Psychology*, **25**, 50-57.
- Cannon, W. B. 1932 *The wisdom of the body*. New York: Norton. 館鄰・館澄江（訳） 1981 からだの知恵——この不思議な働き 講談社
- Ekman, G. 1955 Dimensions of emotion. *Acta Psychologica*, **11**, 279-288.
- Engen, T., Levy, N., & Schlosberg, H. 1957 A new series of facial expressions. *American Psychologist*, **12**, 264-266.
- Engen, T., Levy, N., & Schlosberg, H. 1958 The dimensional analysis of a new series of facial expressions. *Journal of Experimental Psychology*, **55**, 454

- 堀野緑・市川伸一・奈須正裕 1990 基本的学習観の測定の試み——失敗に対する柔軟的態度と思考過程の重視—— 教育情報研究, **6**, 3-7.
- 岩下豊彦 1983 SD 法によるイメージの測定 川島書店
- James, W. 1890 *Principals of psychology* (2 Vols.). New York: Holt, Rinehart and Winston.
- Lazarus, R. S. 1968 Emotions and adaptation: Conceptual and empirical relations. In W. J. Arnord (ed.), *Nebraska symposium on motivation*. Lincoln: University of Nebraska Press.
- 松山義則・浜治世・川村安子・三根浩 1978 情動語の分析 心理学研究, **49**, 229-232.
- Mehrabian, A. 1980 *Basic dimensions for a general psychological theory: Implications for personarity, social, environment and developmental studies*. Cambridge, Massachusetts: Oelgeschlager, Gunn & Hain.
- 奈須正裕 1992 達成関連感情への原因帰属理論的アプローチ 群馬法専紀要, **6**, 41-60.
- 奈須正裕 1993a 達成関連感情の認知的規定因——結果に対する主観的評価と原因帰属について—— 神奈川大学経営学部国際経営論集, **4**, 223-243.
- 奈須正裕 1993b パーソナリティからみた達成関連感情の特徴 神奈川大学心理・教育論集, **11**, 14-28.
- 奈須正裕 1993c 達成関連感情の認知的規定因, 動機づけ機能, 構造 博士学位請求論文 (東京大学: 審査中)
- 奈須正裕・堀野緑 1991 原因帰属と達成関連感情 教育心理学研究, **39**, 332-340.
- Nowlis, V. 1965 Research with the Mood Adjective Check List. In S. S. Tomkins & C. E. Izard (eds.), *Affect, cognition and personality*. New York: Springer-Verlag.
- Osgood, C. E., Suci, G. J., & Tannenbaum, P. H. 1957 *The measurement of meaning*. University of Illinois Press.
- Plutchik, R. 1962 *The emotions: Facts, theories, and a new model*. New York: Random House.
- Plutchik, R. 1980 *Emotion: A psychoevolutionary synthesis*. Harper & Row.
- 212 国際経営論集 No. 6 1994

- Russell, J. A., & Mehrabian, A. 1977 Evidence for a three factor theory of emotion. *Journal of Research in Personality*, **11**, 273-294.
- Schachter, S. 1964 The interaction of cognitive and physiological determinants of emotional state. In L. Berkowitz (ed.), *Advances in experimental social psychology*, 1. New York : Academic Press.
- Schlosberg, H. 1954 The dimensions of emotion. *Psychological Review*, **61**, 81-88.
- 寺崎正治・岸本陽一・古賀愛人 1992 多面的感情状態尺度の作成 心理学研究, **62**, 350-356.
- Tomkins, S. S. 1962 *Affect, Imagery, Consciousness*. Vol I (Positive affect) New York : Springer-Verlag.
- Tomkins, S. S. 1963 *Affect, Imagery, Consciousness*. Vol II (Negative affect) New York : Springer-Verlag.
- Valins, S. 1966 Cognitive effects of false heart-rate feedback. *Journal of Personality and Social Psychology*, **4**, 400-408.
- Watson, D., & Tellegen, A. 1985 Toward a consensual structure of mood. *Psychological Bulletin*, **98**, 219-235.
- Woodworth, R. S., & Schlosberg, H. 1954 *Experimental psychology*. New York : Holt, Rinehart and Winston.
- Weiner, B., Russell, D., & Lerman, D. 1978 Affective consequences of causal ascriptions. In J. H. Harvey, W. J. Ickes, & R. F. Kidd, (eds.), *New directions in attributional research*. Vol. 2. Hillsdale, New Jersey : Erlbaum.
- Weiner, B., Russell, D., & Lerman, D. 1979 The cognition-emotion process in achievement-related contexts. *Journal of Personality and Social Psychology*, **37**, 1211-1220.

付 記

本研究は部分的に、文部省平成4年度科学研究費補助金(奨励研究A)「学業達成場面における感情が学習行動及び学習結果に与える影響」(研究代表者 奈須正裕)(課題番号05710097)によった。